

アイヌ民族による日本語筆記資料についての考察 —知里幸恵の『アイヌ神謡集』「序」を題材として—

大喜多 紀明

アブストラクト

本稿では、知里幸恵による『アイヌ神謡集』の「序」をテキストとして、著者（知里）による文章の推敲が修辞表現にもたらす影響を、交差対句を調査する視点から行った。アイヌ民族における特徴的な修辞技法である交差対句は、話者が日本語を使用した場合、その談話資料においてもしばしば出現する。本稿におけるテキストの場合、筆記資料であり、かつ、文章自体に著者（知里）による推敲が加えられている。それにも拘わらず、テキストに細密な交差対句が確認されたということは、交差対句を誘導するインフォーマントの心性がもたらす指向性と、インフォーマントが持つ、「意識下」における技巧（推敲がもたらす技巧）の指向性が、少なくとも、知里においては一致していることを示している。

キーワード：アイヌ語日本語二重話者、日本語筆記資料、アイヌ神謡集、交差対句

1. はじめに

アイヌの口頭資料にはしばしば交差対句形式が見出される。筆者は、このような修辞技法が、アイヌの民俗性に一因するものと考えている。このことは本稿における前提である。現在まで、筆者は、アイヌ口頭資料についての調査を修辞論的な視点から行ってきた。その一環として、二名のアイヌ語日本語二重言語話者である萱野茂と杉村満（本稿では全ての敬称を省略している）を話者とする日本語自然構文をテキストとして、それらにおける修辞表現を前稿では調べた。（大喜多, 2012a, 23-34）その結果、二名の話者による日本語テキストには明確な交差対句を確認することができた。このことは、アイヌの民俗性に一因する修辞表現法が、彼らの日本語による談話にも影響を与えたことを証左する事例であると筆者は前稿で判断した。本稿では、前稿の見解を踏まえて、知里幸恵による筆記資料を調査した。

本稿でとりあげたテキストは、アイヌ語日本語二重言語話者である知里が執筆した日本語筆記資料、『アイヌ神謡集』序である。この文書は、歴史上はじめて、アイヌ口承文芸をアイヌ民族の手で筆記した書物である『アイヌ神謡集』（知里, 1972）の序文として知里が執筆したものである。本稿では、このテキストについて、修辞論的な視点からの分析を行ってみる。

ところで、本稿におけるテキスト「序」が有する大きな特徴は、口頭資料ではなく筆記資料（書籍の序文）であるという点である。（中川, 2011, 139-156）書籍の序文であるということは、不特定多数の読者による閲読を前提として書かれていることを意味している。この書籍の著者である知里は、死の直前まで『アイヌ神謡集』の推敲作業を続けたという。（藤本, 2002）このことから、知里による推敲が修辞構造にもたらす影響を調査する上で、本テキストがふさわしい資料であると筆者は判断した。本稿の目的は、アイヌ民族の日本語構文に対して、著者としての知里による推敲がもたらす文章表現への影響を調査することにある。

2. 先行研究

アイヌ民族による口頭資料は、口承文芸資料と談話資料に大別できる。さらに、口承文芸資料には、例えばカムイユカラ（神謡）やメノユカラ（女の謡）のような韻文形式のものと、例えばウウェベケレ（散文説話）に代表されるような散文形式のものとがある。筆者の今までの調査では、これらのいずれの形式においても、しばしば、交差対句が確認されている。それぞれの形式において、これまでに調査し、交差対句を確認できた代表的な資料を以下に列挙する。

I：アイヌ口承文芸資料

①韻文形式：

【伝承者】知里幸恵 (カムイユカラ)

狐が自ら歌った謡「トワトワト」：大喜多, 2012b, 147-158

兎が自ら歌った謡「サンバヤ テレケ」：大喜多, 2011, 24-32

谷地の魔神が自ら歌った謡「ハリツ クンナ」：大喜多, 2012c, 158-166

小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」：大喜多, 2012b, 147-158

蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」：大喜多, 2012b, 147-158

小オキキリムイが自ら歌った謡「クツニサ クトクトン」：大喜多, 2011, 24-32

小オキキリムイが自ら歌った謡「この砂赤い赤い」：大喜多, 2012b, 147-158

沼貝が自ら歌った謡「トヌベカ ランラン」：大喜多, 2012b, 147-158

【伝承者】平村つる (メノコユカラ)

スズメの神：大喜多, 2012d, 181-213

【伝承者】小川シゲノ (メノコユカラ)

スズメの酒盛り：大喜多, 2012d, 181-213

②散文形式：

【伝承者】平村幸作 (ウウエペケレ)

「平取の村の下のはずれに貧乏人の夫婦が住んでいました」：大喜多, 2012e, 157-165

【伝承者】貝沢ちき (ウウエペケレ)

「バナンペとペナンペがいました」：大喜多, 2012d, 181-213

【伝承者】知里真志保 (ウウエペケレ)

「バナンペ尻滑り」：大喜多, 2012c, 158-166

【伝承者】平村つる (ウウエペケレ)

「私は石狩に住む女です(和人の夫をもった石狩の女の話)」：大喜多, 2012f, 133-144

【伝承者】平賀サダモ (ウウエペケレ)

「母と父がその息子を和人にやって置いて来た」：大喜多, 2012g, 159-170

II：アイヌ語による談話資料

【話者】鳩沢ワテケ (日常会話)：大喜多, 2012f, 133-144

【話者】平賀サダモ (日常会話)：大喜多, 2012f, 133-144

【話者】二谷善之助 (挨拶口上)：大喜多, 2012e, 157-165

【話者】鳩沢ワテケ (挨拶口上)：大喜多, 2012e, 157-165

【話者】上田トシ (挨拶口上)：大喜多, 2012e, 157-165

上記のように、アイヌ民族における口承資料および談話資料には、しばしば交差対句が見出せる。アイヌ民族の特徴的な表現法の一つである交差対句は、上記の表で示されるように、アイヌ口承文芸 (I) の形式が韻文 (I - ①) であるかそれとも散文 (I - ②) であるかという点には拘束されない。また、交差対句は、アイヌ口承文芸資料 (I) のみに見出せる特徴なのではなく、アイヌ語での談話資料 (II) にも確認できる特徴である。

さらに前稿 (大喜多, 2012a, 23-34) では、二名のアイヌ語日本語二重言語話者 (萱野茂・杉村満) による日本語での談話資料の構造を調査した。その結果、この両者の日本語による談話テキストにおいても交差対句が確認された。こうした前稿での事例は、アイヌ語話者によるアイヌ語資料に確認できる修辞技法が、アイヌ話者による日本語の修辞表現に干渉したことを示すものである。(大喜多, 2012a, 23-34)

ところで、前稿におけるテキストは、話者の「談話」による日本語のテキストであった。このことは、インフォーマントが「無意識下（推敲していない状況）」において使用する修辞技法が得られたと考えられる。一方、本稿では逆に、インフォーマントが「意識的（推敲した状況）」に用いる修辞技法を抽出することが目的である。

3. テキストについて

本稿のテキストは、『アイヌ神謡集』（知里, 1972）の「序」である。この「序」は、知里の執筆による。現在、アイヌ語は消滅危機言語とされており、アイヌ語を母語とする人はほとんどいない。しかし、知里が生活していた時期は、まだアイヌとしての民俗文化が実質的に残っており、知里自身もアイヌ語日本語二重言語話者であった。知里はアイヌ語と日本語の環境で生活し、祖母・モナシノウクから多くのアイヌ口承文芸を受け継いだ。歴史上はじめてアイヌの文芸を、アイヌ民族自身の手によって記録した書物である『アイヌ神謡集』は、知里によって編纂・翻訳されたのであり、この書物は、その後のアイヌ研究に対して大きな影響を与えた。（切替, 2003；佐藤, 2004, 1-32）

知里は、その文章を読む限り、大正 11 年（1922 年）3 月 1 日に『アイヌ神謡集』の「序」を書いた。この文章は、当時アイヌ民族が直面していた事情をアイヌ民族の視点で描いており、（丸山, 2000, 73-92）知里自身が抱く深い同胞愛が綴られている。また、アイヌ文化の中で生活したアイヌ民族（上野, 2011, 211-224）による吟味された日本語文章であるという点で、アイヌ語日本語二重言語話者の日本語の言語的特徴を調査するにおける言語資料として価値があると筆者は判断している。

はじめに、「序」の全文を引用転記する。

其の昔此の廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。天真爛漫な稚児の様に、美しい大自然に抱擁されて のんびりと楽しく生活してみた彼等は、眞に自然の寵児、何と云ふ幸福な人だち（ママ）であつたでせう。冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鷗の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に嘖づる小鳥と共に歌ひ暮して蒔とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすゝきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。嗚呼何といふ 楽しい生活でせう。平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて野邊に山邊に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も又何處。僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは一舉一動宗教的感念に支配されてゐた昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで 行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、あさましい姿、おゝ亡びゆくもの……それは今の私たちの名、何といふ悲しい名前を私たちは持つてゐるのでせう。其の昔、幸福な私たちの先祖は、自分の此の郷土が末にかうした惨めなありさまに變らうなどとは、露ほども想像し得なかつたのでありませう。時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗殘の醜をさらしてゐる今の私たちの中からも、いつかは、二人三人でも強いものが出て來たら進みゆく 世と歩をならべる日も、やがては來ませう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈つてゐる事で御座います。けれど……愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる爲に用ひた多くの言語、言ひ古し、殘し傳へた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失せてしまふのでせうか。おゝそれはあまりにいたましい名殘惜しい事で御座います。アイヌに生れアイヌ語の中に生ひたつた私は、雨の宵雪の夜、暇ある毎に打集ふて私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。私たちを知つて下さる多くの方に讀んでいただく事が出來ますならば、私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

大正十一年三月一日

また、1節で述べたように、知里は、死の間際まで『アイヌ神謡集』の推敲作業を続けたとされる。(藤本, 2002)

4. テキストの構造

はじめは、テキストの前半部分についてである。以下、テキストの前半箇所である。ここでは、筆者による記号と下線が付されている。

A 其の昔 B 此の廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。C 天真爛漫な稚兒の様に、D 美しい大自然に抱擁されて E のんびりと E´ 楽しく生活してみた彼等は、D´ 眞に自然の C´ 寵兒、何と云ふ幸福な人だちであつたでせう。B´ 冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鴉の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に轉づる小鳥と共に歌ひ暮して蒔とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすゝきをわけて、宵まで鮭とる篝も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。嗚呼何といふ 楽しい生活でせう。A´ 平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて野邊に山邊に嬉々として暮してゐた多くの民の行方も又何處。

ここで、付された下線箇所を配列すると次のようになる。

交差対句①

- A その昔
- B 北海道は自由の天地
- C 稚兒
- D 美しい大自然
- E のんびり
- E´ 楽しい
- D´ 眞に自然
- C´ 寵兒
- B´ 北海道での楽しい生活
- A´ 今は昔

まず、Aでは、昔のことについて言及しているのに対し、A´は、今では昔のことになってしまったという意味である。BとB´では、共に「北海道」とそこでの「生活」について書かれている。CとC´については「兒」という言葉が共通している。また、D・D´は、共に「自然」についての言及である。そして、E・E´は、「のんびり」と「楽しい」が対応関係にあると考えられる。ここでは、合計5対の対応を確認することができる。

次に、テキストの後半分の箇所についてである。ここでも、記号と下線は筆者が施している。

F 僅かに残る私たち同族は、進みゆく世のさまに G たゞ驚きの眼をみはるばかり。而も其の眼からは H 一舉一動宗教的感念に支配されてゐた昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、不安に充ち不平に燃え、鈍りくらんで 行手も見わかず、よその御慈悲にすがらねばならぬ、I あさましい姿、J おゝ亡びゆくもの K ……それは今の私たちの名、何といふ悲しい名前を私たちは持つてゐるのでせう。其の昔、幸福な私たちの先祖は、自分の此の郷土が L 末にかう

した惨めなありさまに變らうなどとは、露ほども想像し得なかつたのでありませう。M時は絶えず流れる、N世は限りなくO進展してゆく。P激しい競争場裡に敗残の醜をさらしてゐる今の私たちの中からも、P'いつかは、二人三人でも強いものが出て來たらO'進みゆくN'世とM'歩をならべる日も、L'やがては來ませう。それはほんとうに私たちの切なる望み、明暮祈つてゐる事で御座います。K'けれど……愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる爲に用ひた多くの言語、言ひ古し、残し傳へた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、J'亡びゆく弱きものと共に消失せてしまふのでせうか。I'おゝそれはあまりにいたましい名残惜しい事で御座います。H'アイヌに生れアイヌ語の中に生ひたつた私は、雨の宵雪の夜、暇ある毎に打集ふて私たちの先祖が語り興じたいろいろな物語の中極く小さな話の一つ二つを拙ない筆に書連ねました。G'私たちを知つて下さる多くの方に讀んでいただく事が出來ますならば、F'私は、私たちの同族祖先と共にほんとうに無限の喜び、無上の幸福に存じます。

付された下線箇所を配列すると次のようになる。

交差対句②

F 私たち同族

G 眼

H 魂の輝きが失われた

I あさましい姿

J 亡びゆくもの

K ……私たちの名前

L 想像もできなかった惨めな有様

M 時が流れる

N 世

O 進展してゆく

P 敗残の醜

P' 強いもの

O' 進みゆく

N' 世

M' 歩をならべる

L' 私たちの切実な願望

K' ……私たちの言葉

J' 亡びゆく弱きもの

I' いたましい事

H' 先祖の口承の一部分

G' 讀んでいただく

F' 私たちの同族祖先

FとF'は、共に、「私たち同族」についての記述である。但し、F'には「祖先」も加えられている。続くGには、「眼を見張る」という言葉がある。それに対して、G'には、「讀んでいただく」とある。この二者は、いずれも「眼で見る」という行為であるという点で共通している。Hは、かつてのアイヌの輝かしい伝統が今は失われているという意味の箇所である。それに対してH'は、かつてのアイヌの伝承を記録として残したという意味の箇所である。この両者は類似

している。

I と I´については、「あさましい姿」と「いたましい事」が意味として対応していると解釈できると同時に、「あさましい」と「いたましい」の語感も類似している。また、J・J´は共に「亡びゆくもの」について書かれている。K と K´は、「……」に加えて、「私たちの名前」と「私たちの言葉」が対応している。

L と L´は、Lでは、「過去」から「現在」を想像しているのに対し、一方のL´では、「現在」から「未来」について願望している。

L 「過去」→「現在」 : 想像

L´ 「現在」→「未来」 : 願望

この対応の様子は、二谷善之助による挨拶口上(大喜多, 2012e, 157-165)にみられた対応関係と類似している。

Mの「時が流れる」は「時間の変化」である。一方、M´の「歩をならべる」は「空間の変化」を比喩として用いて「地位の変化」を描いている。つまり、「物理的変化」どうしによる対応であると言える。(大喜多, 2012d, 181-213) また、「流れる」と「ならべる」の語感も似ている。NとN´は「世」という言葉が共通している。OとO´の「進展してゆく」と「進みゆく」は同じ意味である。そして、P「敗残の醜」とP´「強いもの」は、正反対の意味を持つ言葉どうしの対応である。この箇所には、合計11対の対応を確認することができる。

続いて、テキストの真ん中付近である。下線と記号は筆者による。

平和の境、それも Q 今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。太古ながらの自然の姿も何時の間にか影薄れて R 野邊に山邊に嬉々として暮らした多くの民の行方も又何處。S 僅かに残る私たち同族は、T 進みゆく世のさまにたゞ驚きの眼をみはるばかり。U 而も其の眼からは一舉一動宗教的感念に支配されてみた昔の人の美しい魂の輝きは失はれて、V 不安に充ち V´ 不平に燃え、U´ 鈍りくらんで T´ 行手も見わかず、S´ よその御慈悲にすがらねばならぬ、R´ あさましい姿、おゝ亡びゆくもの……それは今の私たちの名、何といふ悲しい名前を私たちは持つてゐるのでせう。Q´ 其の昔、幸福な私たちの先祖は、自分の此の郷土が末にかうした惨めなありさまに變らうなどは、露ほども想像し得なかつたのでありませう。

ここで、施された下線箇所を配列する。

交差対句③

Q 今は昔 急速な變轉

R 嬉々として暮らす民が失われた

S わずかに残る同族

T 変わりゆく世に眼を見張るのみ

U 目の輝きが失われる

V 不安に充ち

V´ 不平に燃え

U´ 鈍りくらむ

T´ 行く手が見えない

S´ 憐みにすがらなければならない

R´ 亡びゆくもの

Q´ その昔 変転を想像できなかった

Q では、昔から今に至るまでの変転の様子が描かれている。それに対して、Q´ には、その昔はこのような変転を予想することさえもできなかったとある。R は、かつての民が失われていったことが書かれている。一方、R´ は、民が既に失われてしまった現状が描かれている。S では、同族がわずかしか残っていないということがあり、S´ には、その同族が憐みを乞わなければならない現状にあることが書かれている。

T には、「過去」から「現在」に至る変転に「眼を見張る」様子があるのに対し、T´ には、「現在」から「未来」に向けての「行く手が見えない」様子がある。この二者は、共に、「見ること」であるという点で一致している。

T 「過去」→「現在」 : 眼を見張る

T´ 「現在」→「未来」 : 行く手が見えない

この T・T´ の対応の様子は、L・L´ と類似している。

U と U´ については、「輝きが失われる」と「鈍りくらむ」という似た意味を持つ言葉どうしが対応している。また、V・V´ の「不安に充ち」と「不平に燃え」も類似している。この箇所には、合計 6 対の対応がある。

最後に、再び冒頭箇所である。なお、下線と記号は筆者による。

W 其の昔此の廣い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました。X 天真爛漫な稚兒の様に、美しい大自然に抱擁されてのんびりと楽しく生活してみた彼等は、真に自然の寵兒、Y 何と云ふ幸福な人だちであつたでせう。Z 冬の陸には林野をおほふ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波、白い鴉の歌を友に木の葉の様な小舟を浮べてひねもす魚を漁り、Z´ 花咲く春は軟かな陽の光を浴びて、永久に囀る小鳥と共に歌ひ暮して蒨とり蓬摘み、紅葉の秋は野分に穂揃ふすゝきをわけて、宵まで鮭とる簞も消え、谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、圓かな月に夢を結ぶ。Y´ 嗚呼何といふ、X´ 楽しい生活でせう。W´ 平和の境、それも今は昔、夢は破れて幾十年、此の地は急速な變轉をなし、山野は村に、村は町にと次第々々に開けてゆく。

ここで、下線箇所を配列すると次のようになる。

交差対句④

W その昔 この広い北海道 自由の天地

X 楽しく生活していた

Y 何という

Z 冬の陸 山又山

夏の海 舟を浮べて ひねもす

Z´ 花咲く春 陽の光

紅葉の秋 圓かな月 夢を結ぶ

Y´ 何という

X´ 楽しい生活

W´ 今は昔 この地 急速な變轉

WとW´では、昔の様子と現在の様子が対応している。X・X´では、「楽しい生活」という共通した意味の言葉が配置されている。また、YとY´についても、「何という」という共通した言葉がある。

ZとZ´については、次のような対応が確認できる。

【季節】	【景色（舞台）】	【時間】
Z 冬の陸・夏の花	山 舟	ひねもす
Z´ 花咲く春・紅葉の秋	太陽 月	夢

まず、Zには冬と夏、Z´には春と秋が配置されている。「季節」を表す言葉が書かれた箇所については、Zでは、「季節」が修飾語であり、逆に、Z´では、「季節」が被修飾語である。また、Zでの舞台は「山」と「海」であるのに対し、Z´では「太陽」と「月」が描かれている。「山」と「海」は、言わば「正反対」の生活舞台を表している。また、「太陽」と「月」は、昼と夜という「正反対」の時間帯を示している。さらに、Zには「ひねもす」という言葉がある。これは朝から夜までという意味である。それに対し、Z´には、「夢」という言葉がある。この「夢」は就寝中にみるものである。したがって、「ひねもす」と「夢」の時間を合算すると、一日24時間の全てを占めることになる。このように、Z・Z´は細かな対応関係を持っている。なお、この交差対句の箇所には4対の対応がある。因みに、Zの「冬の陸・山」と「夏の花・舟」は対句である。同様に、Z´における「花咲く春・太陽」と「紅葉の秋・月」も対句である。

5. 考察

本稿でテキストとした『アイヌ神謡集』序には、交差対句を確認することができた。その中の4例の交差対句を本稿では紹介している。

本稿で確認できた特徴的な対応の事例として、次の3点を挙げる事ができる。

- ①時間経過どうしの対応
- ②異なる種類の「物理的変化」どうしによる対応
- ③類似した語感の語彙どうしの対応

はじめに、①について述べる。前節のL・L´とT・T´は、共に「過去」から「現在」に至る移り変わりと「現在」から「未来」向けての移り変わりが対応している。このような事例は、二谷の挨拶口上で確認できた対応（大喜多, 2012e, 157-165）と同種の対応である。ここで、二谷の挨拶口上における対応を示す。

交差対句（二谷の挨拶口上）

A 出合い	【過去→現在】
B 教えてあげたい	【過去→現在】
C 出払う	【過去→現在】
D 話聞かせる	【過去→現在】
D´ 話聞かせる	【現在→未来】
C´ 持って行く	【現在→未来】
B´ 話をやめる	【現在→未来】
A´ 別れ	【現在→未来】

ここで、AからDまでの箇所は、「過去」から「現在」に至るまでの経緯説明に費やされており、一方のD´からA´は、その時点における「現在」から「未来」に至る出来事が描かれている。二谷の場合は、交差対句の対応の全てが「過去」→「現在」と「現在」→「未来」との対応である。本稿のL・L´とT・T´は、「過去」→「現在」と「現在」→「未来」との対応であるが、それぞれが属する交差対句の全体が同様の対応であるという訳ではない。

続いて、②についてである。MとM´では、「時間の変化」（時が流れる）と「空間の変化」もしくは「地位の変化」（歩をならべる）が対応している。この対応は、異なる種類の「物理的変化」どうしによる対応であると判断できる。このような事例は、小川シゲノを話者とするメノコユカラ「スズメの酒盛り」で確認されている。（大喜多, 2012d, 181-213）ここでの交差対句を次に示す。

交差対句（スズメの酒盛り）

- A 一本の穀物の穂を臼でつく
 B 二、三日が経つ **【時間の経過】**
 C 人間たちの踊り
 C´ カラスが跳ねる（人間を真似た行為）
 B´ 外に出る **【空間の移動】**
 A´ 一つの糞の塊を行器に入れる

上記の「スズメの酒盛り」における交差対句のB・B´では、「時間の経過」と「空間の移動」が対応関係を結んでいる。これは、異なる種類の「物理的変化」どうしが対応している。本稿のM・M´もこれと同種の事例である。

最後に、③についてである。テキストのIとI´では、「あさましい」と「いたましい」が対応しており、MとM´の「流れる」と「ならべる」とが対応している。これは、似た語感どうしの対応である。他のテキストにおけるこれに似た事例としては、杉村満の伝承資料（大喜多, 2012a, 23-34）に確認できる対応があげられる。

交差対句（杉村伝承資料）

- D うん、やるやるやる。
 E ウポポとは違う
 F シノッチャはカムイノミに似ている
 F´ シノッチャはカムイノミに似ている
 E´ ユーカルとは違う
 D´ うん、立ってやる

ここでのDとD´には、共に「うん」という返答と「やる」という言葉が配置されている。しかしながら、この両者は、言葉としては似ているのだが、意味する事柄が異なる。Dでは、質問者である甲地が「タブカラも、でも足踏みしますよね？」と杉村に尋ねたことについての返答である。一方、D´は、「シノッチャ」が「ユーカル」や「カムイユーカル」とは異なることを指し示すための言葉である。つまり、DとD´とは、言葉は類似しているが意味が異なる。換言すれば、DとD´は意味による対応ではなく、むしろ、語感の類似性による対応であると考えべきである。したがって、本稿のI・I´およびM・M´は、杉村伝承資料におけるD・D´と同種の対応であると判断できる。

『アイヌ神謡集』序における交差対句は上記のような特徴を持つ。それ以外の対応についても、例えば、F~P・F´~P´における、11対という対応数の多さや、Z・Z´にみられるような文芸的精緻さが確認できるように、本テキストにおける交差対句は、どちらかと言えば綿密な対応関係によって構築されていることがわかる。

アイヌ民族が「語り」を行う場合、語られた口頭資料には、しばしば交差対句が表出される。この交差対句の使用が、話者の「無意識下」でなされるのか、それとも「意識下」でなされるのか(交差対句が話者の認識の下で使用されるか否か)という疑問がある。もしかしたら、ある話者によっては認識の下で使用され、また、別の話者では認識なく使用されるのかもしれない。いずれにせよ、このような点については、現時点では明らかになっていない。

今回のテキストは、口頭資料ではなく、筆記資料である。また、本稿でのテキストが、書物の序文であるということから、著者である知里は、執筆にあたり文章を推敲し、かつ、吟味したことが予想できる。本稿では、著者である知里がこのような条件下で筆記した文章においても交差対句が確認されるという知見を得ることができた。しかも、見出された交差対句は、どちらかと言えば精緻である。テキストに確認される交差対句は、アイヌにおける特徴が、日本語における修辭に影響を与えた結果として表出されたものであると理解できる。同時に、知里の日本語テキストの場合は、たとえ文章が推敲されていたとしても明確に表出され、むしろ、どちらかと言えば精緻な構造となっているという点から、交差対句を誘導する指向性と、知里自身が持つ、「意識下」における技巧(著者の推敲がもたらす技巧)が、少なくとも、知里においては一致していることを示している。今後、知里が筆記した資料の中でも、他者の閲読を前提とせず、おそらくほとんど推敲がなされていないと解釈できる知里の筆記資料である「日記」(知里, 1996)の修辭構造を調査し、本稿で得られた知見と比較することで、推敲がもたらす修辭様式への影響を確認することができると考え、調査を進めている。それに加えて、知里以外のアイヌ民族による日本語筆記資料についても、今後、調査する予定である。

引用文献

- 上野昌之, 2011「アイヌ語の衰退と復興に関する一考察」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』11号, 211-224, 埼玉学園大学
- 大喜多紀明, 2011「「アイヌ神謡」の修辭パターンから心意を辿る(上) —「交差対句」を糸口として—」『西郊民俗』217号, 24-32, 西郊民俗談話会
- 大喜多紀明, 2012a「アイヌ民族を話者とする日本語構文に見られる特徴」『ポリグロシア』23巻, 23-34, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多紀明, 2012b「『アイヌ神謡集』に掲載されたカムイユカラについての考察—修辭論的視点より—」『人間生活文化研究』22号, 147-158, 大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多紀明, 2012c「アイヌ口承文芸「ハリツ クンナ」と「パナンペ尻滑り」についての考察」『国語論集』9号, 158-166, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室
- 大喜多紀明, 2012d「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』11号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多紀明, 2012e「アイヌの挨拶表現と民俗的修辭構造」『ポリグロシア』22巻, 157-165, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多紀明, 2012f「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辭」『比較民俗研究』27号, 133-144, 比較民俗研究会
- 切替英雄, 2003『アイヌ神謡集辞典—テキスト・文法解説付き』大学書林
- 佐藤知己, 2004「知里幸恵『アイヌ神謡集』の難読箇所と特異な言諸事例をめぐって」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』10号, p1-32, 北海道立アイヌ民族文化研究センター
- 知里幸恵, 1972『アイヌ神謡集』岩波文庫
- 知里幸恵, 1996『銀のしずく知里幸恵遺稿』草風館
- 中川裕, 2011「アイヌの神謡における叙述者の人称」『北方言語研究』1号, 139-156, 北海道大学大学院文学研究科
- 藤本英夫, 2002『知里幸恵—十七歳のウエベケレ』草風館
- 丸山隆司, 2000「〈他者〉の言語—知里幸恵『アイヌ神謡集』〈序〉文をめぐって(1)」『藤女子大学国文学雑誌』64号, 73-92,

藤女子大学国語国文学会